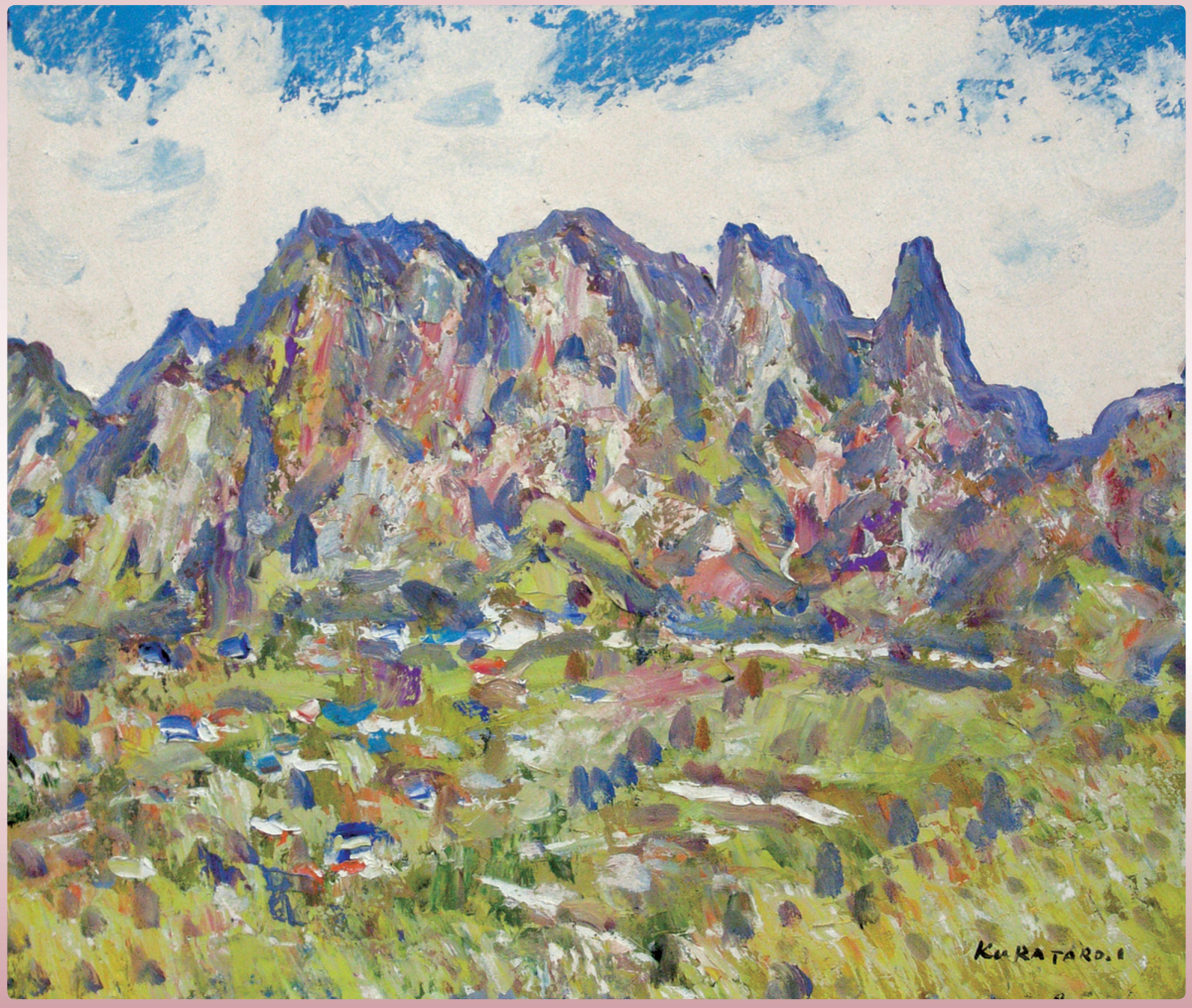
上州文化

contents

巻頭言／渡辺幸男 ②
特集 世界に二つの縁切寺／高木 侃 ③
上野東歌探訪／北川和秀 ⑥
㈶群馬県教育文化事業団 INFORMATION ⑩
地域文化をつなぐ／平形作太郎 ⑪
ART NOW 「表現へのアプローチ」／河内世紀一 ⑫
カフェの隅から ちょっとお洒落に／竹田朋子 ⑭



妙義中之岳　稲川庫太郎

財団法人 群馬県教育文化事業団 2011 No.128

巻頭言「創刊一二四周年を迎えて」

上毛新聞社代表取締役社長　渡辺幸男

上毛新聞は十一月一日、一二四周年を迎えた。明治二十年の創刊である。「散切頭を叩いてみれば文明開化の音がする」といった戯れ言が流行っていた時勢でもあったろう。この時代に上毛新聞は、群馬・上野の両新聞が合併して第一号を出した。

発刊の辞には感服する。政治、経済、文化、どれを取っても当時とは比べようがないほど変化しているが、今でも立派に通用する。新聞界に身を置く私どもが決して忘れてはならないジャーナリスト精神を宣言している。

長文なのでその一部を紹介したい。

「凹頑を洗い、禿筆をなめ、繁雑の社会に立って繁雑の出来事を網羅、かんかんの論、がくがくの議、党せず、偏せず、与論の喚発者となり、社会の羅針盤をもって自任せんとす」。

翻って今、私ども新聞人が果たしてこの誓いをどこまで踏襲しているか自問自答している。自信をもって首を縦に振れるよう、日々、全神経を集中し新聞づくりに専念しなければならない。

残念ながら新聞業界は右肩下がりの時代を迎えている。新聞離れが思いのほか早い。インターネットの普及、読者層の高齢化―など原因は諸々。

だが、新聞離れはそれだけだろうか。最大の要因は新聞が面白くないからではないか。作り手側として、反省しなければならないのは、殊更インターネットに押しつけて〝他人のせい〟にしてはいまいか。

私はこの六月十日、社長に推挙された。社内の就任あいさつで、創刊の辞に触れながら「読者が必要とする新聞をつくろう」と訴えた。高い理念、崇高な理想を根底に、読む側に作り手の心が伝わり、記事の一本一本が生き生きとして読む側に伝わらなければ感動は起こせない。発行者として三十ページ余りの紙面の中に、一日一本でも読者の心に響く記事を掲載したい。

上毛新聞社は創刊一二〇周年を記念して一度に四部印刷できる輪転機を導入した。全国に一基たりともない優れた輪転機だ。その機能を生かし政治、経済、地域面、社会、文化などを中心とした紙面とスポーツ、芸能、ラジオ・テレビが中心面の二部制を連日取っている。さらに進めて木、日曜日付けは三部制としている。全国に例がない紙面構成である。

私ども上毛新聞が目指すのは全国の地方紙の中で冠たる新聞を発行することだ。そのことによって中央紙（全国紙）が主戦場として販売合戦を繰り広げる関東平野にあって、初めて読者の支持を受けることができよう。新しい紙面づくりに挑戦しながら、群馬の今を歴史に刻み、願わくば県民から「郷土に上毛新聞があってよかった」と評価されるような新聞づくりにまい進し、その結果、県民の生活、文化向上に役立てれば群馬県の郷土紙としてこの上ない喜びである。

世界に二つの縁切寺

縁切寺満徳寺資料館の企画展等の諸行事―平成の満徳寺（3）

専修大学教授・
縁切寺満徳寺資料館館長
髙木侃

企画展―三くだり半展と特別展

資料館の使命は、常設展と企画展です。前者はもっぱら県重要文化財・満徳寺文書（川越家所蔵）を展示させていただき、縁切寺への理解を深めていただきます。また、春秋に開催の企画展を通して、その意義と今日的役割を市民に向けて情報発信することです。

初めに一九九三年開館一周年に「東慶寺天秀尼展」、翌年春秋に「漱石と縁切寺東慶寺」「近代の縁切寺―縁切寺法の終焉とその後」、一九九七年千姫生誕四〇〇年記念には「千姫展」。二〇〇二年開館一〇周年記念に「女往来物の世界―女筆手本を中心に」以降、小泉吉永氏から資料借用・解説の執筆などの全面的な協力をえて、次々と往来物の世界に関する特別展「女大学の世界」「寺子屋の世界」「江戸の子育てⅠ・Ⅱ」を開催しました（ちなみに、小泉氏は在野の研究者ですが、往来物の権威で「女筆往来物の研究」で金沢大学から学位を取得された博士で、法政大学の講師でもあります）。

千姫展図録

一九九五年本堂復元一周年記念として、縁切寺の資料館であることから、離婚にちなんだ「三くだり半」の企画展を開催することにしました。第一回は、「女の書いた三くだり半」、ただし、未婚の女性の書いた縁切状で、妻本人の書いたものではありません。以後の企画展の主題だけをあげれば、三くだり半の「行数」、「離婚理由」「地域性」「はんこ」「武士の三くだり半」「離縁状返り一札」「離縁状の表題」「縁切寺の三くだり半―鎌倉東慶寺を中心に」「切られた三くだり半」「満徳寺離縁状」「女からの三くだり半」「帰縁証文」「むこ養子の離縁状」「先渡し離縁状」「三くだり半No.1」「飯盛女の三くだり半」「三くだり半―いつからいつまで」「三くだり半の仲人」「書式」「執心切れ一札」「三くだり半の慰謝料」と続いています。

そのなかで第八回は「明治の三くだり半―上田四郎コレクションを中心に」でした。上田四郎氏は県内富岡・高崎市内で弁護士として活躍される一方で、在野のすぐれた法制史研究者でした。離縁状の研究は、戦前、穂積重遠・石井良助両博士がわずかになされていましたが、その後はだれも手をつけませんでした。上田氏は県内を渉猟、史料発掘に努め、本格的な離縁状研究を『群馬文化』誌上に「離縁状の一研究」として結実されたのでした。一九五九（昭和三四年）のことですが、戦後、この分野の研究をスタートされた意義は大きく、直ちに山中永之佑氏の研究に示唆を与え、また石井博士の『江戸の離婚』（昭和四〇年）を促すものとなりました。その後、私もその学恩にあずかって今日にいたっています。この企画展はいわば上田四郎氏の業績を顕彰するものでもあったとはいえ、遺族を代表して寛氏から展示した離縁状が私に恵与され、その感激はいまだに

忘れられません。「上田コレクション」として私所蔵のなかに加えて大切にしています。

そして、今秋二十六回目の企画が「館所蔵の三くだり半」です。十九年間に収集・購入した離縁状が三十点を超え、館所蔵の離縁状だけで企画展が開催できることには感慨深いものがあります。

資料館の行事―徳川大学

資料館では、企画展のほか、公開講座がもう一つの代表的行事です。公開講座はよく〇〇市民大学などと言われますが、資料館の所在する徳川の地名を冠して「徳川大学」と称することにしました。大学なら学長が必要で、町のときは町長に、合併後は資料館を主管する教育長に就任していただいています。副学長には資料館を支援する友の会会長がなり、さしずめ館長は事務局長です。

一九九三（平成三）年六月十二日が最初で、網野善彦氏の『日本の歴史をよみなおす』でした。これまで延べ六十三名に及ぶ方々にお出でいただきました。回数の多い順にあげれば、江戸の往来物研究家で、特別展に資料借用や解説等にご高配をいただいた小泉吉永氏が五回、ついでＮＨＫ総合テレビ「お江戸でござる」の漫画家・杉浦日向子氏が四回（すべてＮＨＫ出演以前）、東慶寺住職・井上禅定師三回、網野善彦（神奈川大学短大部教授）・阿部謹也（一橋大学学長）・越川禮子（江戸しぐさ語り部）・平岩弓枝（作家）の各氏が二回、一回来られた方は、以下に氏名のみを掲げます（来訪順、敬称略、演題と講演者の肩書等は、資料館ＨＰの新着情報から企画展をみていただければ過去のものがすべてご覧いただけます）。佐藤洋子、辻達也、楠戸義昭、竹内謙、星野澄子、麻生圭子、林薫一、上野千鶴子、田中優子、市原悦子、峰岸純夫、富岡恵美子、落合延孝、竹内誠、井上和代、栗原弘・葉子夫妻、柴桂子、神坂次郎、樋口恵子、徳川義宣、鎌田浩、笠谷和比古、山田昌弘、落合恵美子、池内ひろ美、小和田哲男、縄田一男、小松和彦、石川英輔、青木美智男、森田登代子、森謙二、磯田道史、大久保治男、山本幸司、山本博文、荒木敏夫です。多士済々、贅沢な顔ぶれです。

杉浦日向子氏の揮毫

徳川大学は、ほかに二つの講座を開講しています。一つは大衆文化講座と称して「落語会」を催しています。復元本堂で一二〇人ほどの聴衆が、マイクなしの本物の落語を鑑賞するわけです。一九九八年六月の柳家権太楼親子会が最初で、十六回目の今秋は、また権太楼師匠をお呼びしています。出演回数の多いのは、柳亭市馬師で四回、ついで柳家はん治師が三回、ほかは柳家花禄・柳家喜多八・立川談四楼・古今亭菊之丞・桃月庵白酒・柳家喬太郎師など、講談では神田松鯉・神田山陽・宝井琴調師、いろもので柳家紫文・東京ガールズなどです。

落語：柳家権太楼師

二つは伝統文化講座で、これも本堂でマイクなしで催し、「薩摩琵琶」の鑑賞です。錦心流中谷派の荒井姿水師を迎えて尺八・地唄舞・長唄・中国三弦などとジョイントして、楽しんでいます。昨年からは西松布咏師をお呼びして「地唄」の鑑賞をしています。徳川大学は文化発信の場としてそれなりの役割を果たしていると確信しています。

琵琶：荒井姿水師

資料館友の会活動―狂言の夕べ

資料館には、開館にあわせて資料館友の会が設立されましたが、この会は「資料館の存立意義を評価して、自らの教養を高めるとともに資料館の活動に協力することにより、尾島町の文化向上に寄与することを目的」としています。その目的を達成するた

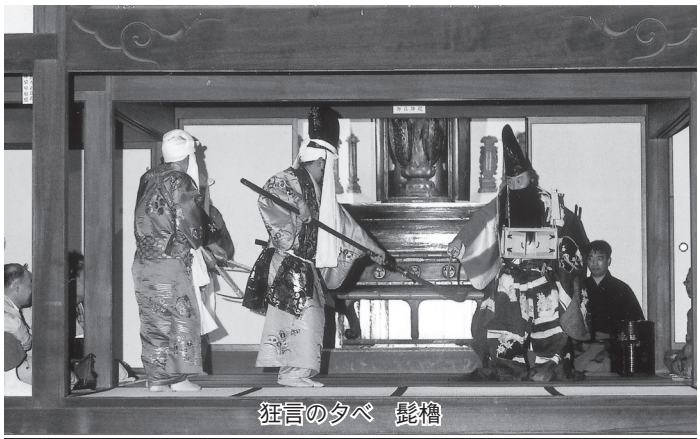
めに、主に二つの事業を行いますが、「狂言の夕べ」と「東慶寺見学会」です。

本堂落成記念のイベントとして何をするか、かなり思案を重ねましたが、満徳寺は、縁切寺として、もともと女性を救済する尼寺であったことから、復元本堂で女流狂言の鑑賞を計画しました。一つは私が学生時代から宝生流の謡と仕舞を稽古し、能狂言に親しんできたので、人を介して和泉元秀宗家に出演をお願いすることができました。一九九四（平成六）年十月のことで、元秀宗家と元弥師に女流狂言師・和泉淳子と三宅藤九郎による「棒しばり・川上」を演じていただきました。翌年にもお願いしましたが、元秀宗家は他界され、「清水座頭・樋の酒」を鑑賞しましたが、宗家亡き後の舞台は、前年に比べると、もう一つ満足がえられませんでしたので、女流にこだわらず、狂言界の最高峰、大蔵流・山本東次郎師にお願いすることにしました。当初（前二回）は資料館主催、つまり町の予算で行いましたが、費用がかなりかかるので、町から出演料相当をいただき、「友の会」主催で行うことになり、今日まで続き（合併後は市補助金事業として開催）、今年で十八回目となります。狂言三番に、小舞や与一語りなどのほか、東次郎師の絵解き（解説）を楽しんでいます。尼寺にちなんで演じていただいた女狂言としては、「箕被・因幡堂・鎌腹・伊文字・二九十八・鬼の継子・千切木・金藤左衛門・髭櫓・鈍太郎・鬼ケ宿」などです。毎回三曲演じていただいているので、すでに四十五番に及びます。この秋は「雁盗人・察化・塗師」でした。東京でないとふれることの少ない日本の伝統芸能を旧本堂で鑑賞することは意義深いものと自負しています。

もう一つの行事が、バスによる東慶寺見学会で、東慶寺では、文化勲章受章者が日本一多く眠る墓域の散策、本堂・水月観音の拝観、宝蔵での研修は毎回のことで、ほかはオプションで、茶室・寒雲亭、円覚寺国宝舎利殿、浄智寺、三渓園内の旧東慶寺本堂などの見学もしました。女性の参加の多い見学で、「鉢の木」の昼食も楽しみの一つのようです。

さて、友の会会員は、その目的通り会費を拠出するだけで何の見返りも期待できません。わずかに年一回の会報と春秋のお知らせを受け取るだけだからです。もっぱらご支援のみをいただいておりまして、館長としてはありがたいかぎりです。

従来ほど市財政は潤沢とはいえない状況です。そのなかで資料館は、来年、二十周年を迎えます。来し方を振り返り、工夫をこらしながら、縁切寺への理解と郷土の歴史への関心を呼び起こすための文化発信に努めたいと、改めて決意している今日この頃であります。この連載は今回で終了します。長い間ご愛読くださり、深謝申し上げます。


狂言のタベ　髭櫓

第１回見学会、故禅定老僧を囲んで

髙木　侃
（たかぎ・ただし）

【プロフィール】

1942年生。中央大学大学院法学研究科修士課程修了後、関東短期大学教授をへて、現職。国際日本文化研究センター客員教授等歴任。満徳寺の研究で法学博士。主要著書に『増補　三くだり半－江戸の離婚と女性たち－』（平凡社ライブラリー）、『縁切寺満徳寺の研究』（成文堂）、『三くだり半と縁切寺－江戸の離婚を読みなおす－』（講談社現代新書）などがある。

上野東歌探訪

北川和秀（きたがわかずひで）　一九五一年生。学習院大学大学院人文科学研究科国文学専攻博士課程修了。同大学助手を経て、一九八五年群馬県立女子大学文学部専任講師。現在は同大学教授。専門は上代文学。主な著書に『続日本紀宣命　校本・総索引』『群馬の万葉歌』など。

今回は碓氷峠をよんだ歌を取り上げる。これまで、伊香保、多胡、佐野など群馬県の西寄りに位置する地の歌を中心に取り上げてきた。そこで前回は東毛の新田郡の歌をよんだのであったが、今回、都合によりまた西毛に戻ってきてしまった。西も西、最も西の上信国境の歌である。次回以降、また東毛の歌を取り上げることにしたい。

今回よむのは次の二首である。

◎日の暮（くれ）に碓氷（うすひ）の山を越ゆる日は夫（せ）なのが袖もさやに振らしつ（三四〇二）

◎ひな曇（ぐも）り碓氷（うすひ）の坂を越えしだに妹が恋しく忘らえぬかも（四四〇七）

二首目は東歌ではなく防人歌である。この連載の題は「上野東歌探訪」となってはいるが、東歌と防人歌は、その地域も作者層も重なるので、併せて取り上げることにした。特にこの二首は、一首目が碓氷峠を越える夫を見送った妻の歌、二首目は碓氷峠を越える時に妻に思いを馳せた夫の歌であり、好対照をなしている。

歌をよむ前に、碓氷峠について触れる。

一、碓氷峠について

右の一首目の歌では「碓氷の山」、二首目の歌では「碓氷の坂」とある。上野国碓氷郡にあって信濃国との国境を形成している山地が「碓氷の山」で、その山を越える道路の国境部分が「碓氷の坂」である。このような境界の場所では、その地の神に御幣などを手向（たむ）けて、旅の安全を祈った。そこで、そういう場所を「たむけ」と言うようになり、後世、「たむけ」→「たうげ」→「とうげ」と変化して、中世の頃に「峠（とうげ）」という語が生まれた。万葉集の頃にはまだ「碓氷峠」という言い方はなく、「碓氷の坂」といった。

国道十八号線や新幹線が通る現在の碓氷峠は明治十六年（一八八三）十二月に完工した新しい経路である。この現碓氷峠の南二・八キロメートルほどのところに入山峠がある。入山峠頂上の鞍部からは、昭和三十年（一九五五）の調査で、縄文・弥生時代の土器片、古墳時代の石製模造品や玉類をはじめ、奈良・平安時代から中世近世に至る時代の多岐に亘る遺物が出土し、古代から利用された経路であることが判明した。一方、現碓氷峠の北やはり二・八キロメートルほどのところには、江戸時代に中山道が通っていた旧碓氷峠がある。

入山峠から祭祀関係の遺物が出土したことで、奈良時代の「碓氷の坂」は今の入山峠と考えられてきた。ところが、平成元年（一九八九）に松井田町の原遺跡で八世紀の駅家関係とみられる大形掘立柱建物が発掘された。もしもこの遺跡が東山道坂本駅の遺構であるなら、その地から入山峠への連絡は不自然であるということで、東山道「碓氷の坂」はほぼ近世中山道の経路に当たるとする説が提唱された。現在のところ、奈良時代の「碓氷の坂」の位置については、入山峠説、旧碓氷峠説の両説があり、まだ決着をみていない。

軽井沢駅の南口から東を望んだパノラマ写真を載せた。入山峠は矢ヶ崎山の背後に位置しており、画面には見えていない。

碓氷の坂は、『日本書紀』の日本武尊の東征の話の中にも登場する。

日本武尊の曰はく、「蝦夷の凶しき首、咸に其の辜に伏ひぬ。唯信濃国・越国のみ、頗未だ化に従はず」とのたまふ。則ち甲斐より北、武蔵・上野を転歴りて、西碓日坂に逮りまや」とのたまふ。故因りて山の東の諸国を号けて、吾嬬国と曰ふ。（『日本書紀』景行四〇年是歳）す。時に日本武尊、毎に弟橘媛を顧びたまふ情有します。故、碓日嶺に登りて、東南を望りて三たび歎きて曰はく、「吾嬬は

文中の弟橘媛は日本武尊の妃である。東征の一行に加わっていた弟橘媛は、走水の海（三浦半島と房総半島との間にある浦賀水道）で暴風に遭遇したとき、神の怒りを鎮めるために自ら進んで海に入り、一行の危難を救った。妃に対する思いが心から離れなかった日本武尊は、碓氷の坂に来た時、東南の方角を望んで「あづまはや（わが妻よ）」と三度嘆き、それが地名「あづま（東国）」の語源になったというのである。同様の話は『古事記』でも語られているが、『古事記』では場所が足柄の坂となっている。

碓氷の坂は信濃・上野の境、足柄の坂は駿河・相模の境に当たっており、どちらも中部地方と関東地方との境界の地である。「坂の東」ということで、この両坂の東を「坂東」と呼ぶ。また、平安時代前期の昌泰二年（八九九）には、群盗の害を防ぐため、碓氷の坂と足柄の坂とに関が設けられた。それで、「関の東」の意で、この両関の東を「関東」とも称するようになった。

二、「日の暮に」の歌について

日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫なのが袖もさやに振らしつ（三四〇二）

比能具礼尓　宇須比乃夜麻乎　古由流日波　勢奈能我素低母
佐夜尓布良思都

碓氷の山をあなたが越える日は、あなたも袖をはっきりとお振りになった。

初句の「日の暮に」を文字通り「日暮れ時に」ととると、日暮れ時に碓氷峠を越えたのでは、山中で夜を迎えることになり、いかにも不自然である。そこで、「日の暮に」は「碓氷」にかかる枕詞であると説かれる。日暮れ時は太陽の日差しが弱いので、「薄日」の意で同音の「碓氷」にかかると理解するのである。今回取り上げる二首目の歌の初句「ひな曇り」も「碓氷」に掛かる枕詞で、こちらは、日が曇っていると「薄日」になるということで同音の「碓氷」に掛

かっており、参考になる。ただ、「日の暮に」を枕詞とした場合、末尾の「に」がやや気になる。枕詞には、「あしひきの」「ひさかたの」「あらたまの」「たらちねの」「ぬばたまの」など「の」で終わるものは多いが、「に」で終わるものはほとんどない。また、掛かり方の点でも、「日の暮に薄日（＝碓氷）」という語の続きの中での「に」の働きがしっくり来ないということもある。

万葉集において、数少ない「に」で終わる枕詞には、「いもがいへに」「わぎもこに」「をとめらに」がある。「いもがいへに」は、「妹の家に行く」意から地名「いくり」に掛かる。「わぎもこに」は、「吾妹子に会う」の意で地名「あふみ」「あふさかやま」「あはぢ」、植物の「あふち」に掛かる。「をとめらに」は、「をとめに会う」の意で地名「あふさかやま」「ゆきあひ」に掛かる。いずれも、「に」は動詞「行く」「会ふ」に連続している。それならば「日の暮に」も動詞に掛かってゆくと考えたらどうであろうか。すなわち「日の暮に薄日」ではなく、「日の暮に失す日」ととるのである。「日暮れ時に日の光が失われてゆく」という意で同音の「碓氷」に掛かる、とすればすっきりするように思う。

「夫なの」は夫。女性から見て夫・恋人・男の兄弟など親しい男性を指す語「せ」に親愛の情を表す「な」が付いた「せな」という語が万葉集に十一例見える。内訳は、東歌に六例、防人の妻の歌に五例で、すべて東国の歌であり、この語は東国方言と思われる。これら十一例の他に、「せな」の下にさらに「な」が付いて「せなな」となったものが一例（未勘国東歌）、「の」が付いて「せなの」となったものが一例（上野国東歌）ある。最後の例が本節で扱っている歌である。「せな」の下に付いた「な」も「の」もさらに親愛の情を表したものと説かれる。「せなな」の例は、「あすか川下濁れるを知らずして夫なと二人さ寝て悔しも」（三五四四）という歌で、意味は、「あすか川の底の方の水が濁っているのを知らずに（あなたの本心を知らずに）共寝をしてしまって悔しい」ということである。「せな」よりも「せなな」の方が本当に親愛の情が深いものやら疑わしい気もするが、しばらく通説に従っておく。

袖を振るのは相手に対する愛情表現。「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」（二〇）という非常に有名な額田王の歌などもある。また、当時は別れに臨んでも袖を振り合った。「石見のや高角山の木の間より我が振る袖を妹見つらむか」（一三二。柿本人麻呂）や「足柄の御坂に立して袖振らば家なる妹はさやに見もかも」（四四二三。武蔵国防人）などは、旅ゆく男が峠などで最後に袖を振った例。「倭道は雲隠りたり然れどもわが振る袖を無礼しと思ふな」（九六六。遊行女婦児島）は、旅ゆく男を見送る女が袖を振った例、「草枕旅行く君を人目多み袖振らずしてあまた悔しも」（三一八四）は人目を憚って袖を振らなかった女がそれを後悔している例である。

旅行く者が袖を振る場所は、峠などの境界であることが多い。境界までは自分の里、自分の国であるが、そこを越えると、その先はもう人の国となる。そこで、最後の名残りに峠で袖を振るのである。そういう背景があるので、今回よんでいる「日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫なのが袖もさやに振らしつ」の歌でも、夫が袖を振っている場所は碓氷峠であるかのように思えてしまう。では、女は碓氷峠を越えようとする男の袖が見えるような場所まで男を送っていったのか。

そうではあるまい。この歌では「碓氷の山を越ゆる日は」とうたっているのであって、「碓氷の山を越ゆる時は」といっているわけではない。碓氷峠を越える日に、家を出たところで袖を振り合ったと理解してよいのではないか。先ほど挙げた「草枕旅行く君を人目多み袖振らずしてあまた悔しも」の歌でも、皆がこの男を見送った場所は、この男の自宅、あるいはこの男の住む里の外れであろう。「葦垣の隈処に立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしそ思はゆ」（四三五七。上総国防人歌）という歌が参考になる。防人として旅を続けているこの男は、出発時に、葦で作った垣根の隅の所に立って袖を濡らして泣いていた彼女の姿が思い出されてならないというのである。この女は、防人に行く男を見送りに来た大勢の人の目を憚って、人知れず男との別れを悲しんでいた。葦垣があるところから、場所は人里、たぶん男の自宅であろうと思われる。

「日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫なのが袖もさやに振らしつ」の歌の末尾は「つ」という完了の助動詞で結ばれている。夫が袖を振ったのは過去のことである。夫が碓氷峠を越えるという日、家を出たところでお互いに袖を振り合っ

て別れを惜しんだ。その時に振った男の袖が脳裏に焼き付いて離れない、というのである。この夫は、あるいは防人として旅立ったのかもしれない。

三、「ひな曇り」の歌について

ひな曇り碓氷の坂を越えしだに妹が恋しく忘らえぬかも（四四〇七）

比奈久母理　宇須比乃佐可乎　古延志太尓　伊毛賀古比之久
和須良延奴加母

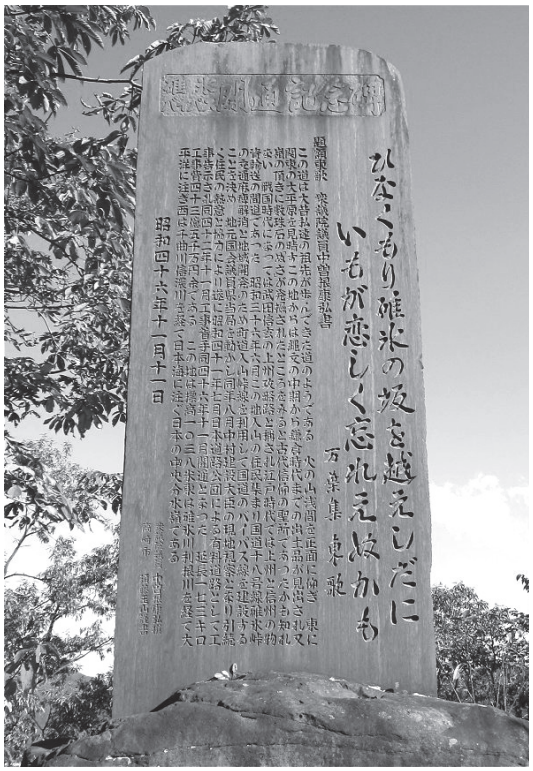
碓氷峠を越える時に、彼女のことが恋しく思われて、忘れることができないことだ。

作者は他田部子磐前。「ひな曇り」の「ひ」は「日」、「な」は名詞と名詞とをつなぐ上代の助詞で「の」と同じ。枕詞。日が曇っている薄い日差しの意から「薄日」と同音の地名「碓氷」に掛かる。上野国の防人は、碓氷の坂を越えて上野国をあとにした。「しだ」は「～する時」。「帰りしな」などという時の「しな」の古形である。「忘らえ」の「え」は可能の助動詞「ゆ」の未然形で、「ゆ」は「る」の古い形。

防人として西国に赴く道中での作である。碓氷の坂は国境の坂なので、これを越えれば、そこはもう他国である。いよいよ故郷とも彼女とも本当の別れとなる。その時、彼女を恋しく思う気持ちがいや増したのである。

歌の内容は、前節で挙げた「足柄の御坂に立して袖振らば家なる妹はさやに見もかも」という武蔵国防人歌と通じるところがあるし、「碓氷の坂」のもつ意味合いは、今回の一首目の「碓氷の山」と重なり合う。

掲載した写真のうち、碓氷バイパス開通記念碑は入山峠に建っており、「ひな曇り」の防人歌を刻む。もう一枚の旧碓氷峠万葉歌碑は旧碓氷峠の見晴台にあり、これには今回取り上げた二首の歌を刻んでいる。



碓氷バイパス開通記念碑

旧碓氷峠万葉歌碑

平成 23 年度

第49回 群馬県文学賞

短歌部門竹内敬子さんほか3名の受賞者決まる！！

小説、評論、児童文学各部門該当作なし

このたび第 49 回を迎えた平成 23 年度の「群馬県文学賞」の受賞者が決定した。

この文学賞は「本県における文学活動の振興をはかるため、一年間における文学各部門の創作活動のうち、特にすぐれたものを選奨」するもので、7 部門に分かれています。残念ながら今年は小説、評論、児童文学部門では該当作がありませんでしたが短歌、俳句、詩、随筆、の 4 部門で心のこもった力作が受賞されました。

○ 短歌部門　　竹内敬子　受賞作「『生きて今あり』30 首」

今回受賞した「生きて今あり」と題する三十首は、女性の観点から生きてある現在を鋭く見つめ、日常生活の今の心を丹念に掬い取った透明感のある歌群である。

「きさらぎの寒夜くだちて窓に見る月はさやけし生きて今あり」

（髙橋誠一委員選考概要から）

○ 俳句部門　　山崎昌彦　受賞作「『希望』30 句」

俳句のレトリックを自在に駆使して、抒情の機微を的確に捉えたセンスは抜群。

「鳴けば淋し鳴きやめばなほ虫の秋」「わがつけし名を子が呼ばれ卒業す」「失ひし人に会ふごと余花に会ふ」人間精神の二律背反性を表現しようとつとめたそのひたむきさが、出席選考委員全員の支持を得たゆえんかもしれない。

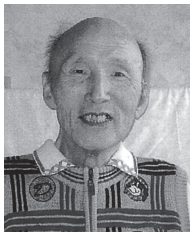
（中里麦外委員選考概要から）

○ 詩部門　　鶴田初江　受賞作「『カワガラス』ほか 4 編」

鶴田さんは現在「裳」の同人として活躍している。以前も何回か最終候補に残り注目されていた方である。巧みな表現力を持ち、自然との関わりを主体的に捉えた端正な抒情詩で読後感が爽やかであるなどの点が評価された。

「カワガラス」「湖畔」「初夏の風が」ほか 2 篇。

（長谷川安衛委員選考概要から）

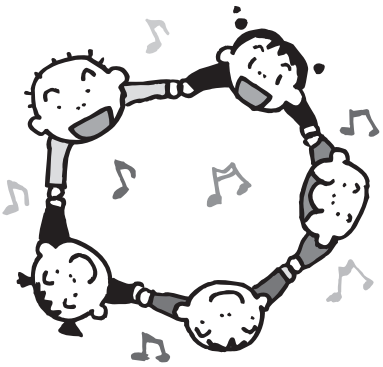


○ 随筆部門　　中西文家　受賞作「風ふたたび」

このエッセイは、自作の解説ではない。エッセイは俳句と一定の距離を保ちながら、饒舌を避けた抑制の効いた筆致で綴られている。作者は二十年ほど前に山岳事故で身体の自由を奪われたが、文学活動においては、そのことが作者の不自由をもたらすのではなく、豊かな想像力と高い表現力を磨く力となっていることが、短い一遍一遍のエッセイから感じられる。それは読者にしみじみとした感動をもたらす、珠玉のエッセイ集である。

（林政美委員選考概要から）

地域文化をつなぐ



高山村文化協会
顧　問　平形 作太郎

伝統文化のゆくえ

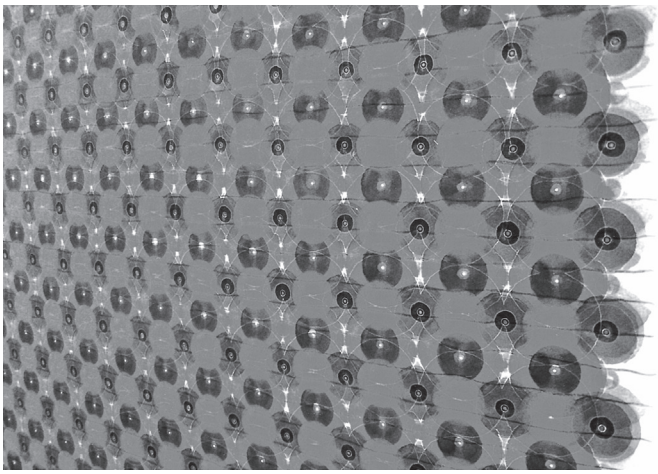
日本民族音楽学会群馬大会が平成十二年に高山村で開催されましたが、「地元の芸能、尻高人形の実際の練習、役原集落の獅子舞を地域の指導者が子供に教えている現場などを見学し、伝承が巧く行われているのを目の当たりにして心強く感じるとともに、改めて民俗芸能の素晴らしさに心を強く打たれた」と学会誌で報告されていました。

豊かな自然と歴史に育まれ、伝承されてきた民俗芸能を事例として取り上げ、地域における伝承の問題、行政の取り組みや芸能に対する学校の役割などがこの会合のテーマでした。その席で、「全国的に見ても唯一特筆に値する人形構造と操法を持つもので、私は日本一の一人遣い人形だと思っている」（西角井正大教授）と評価された、国選択、県指定無形民俗文化財の尻高人形芝居に対する行政支援の経緯について、私から概要を報告しました。

人形芝居は、大夫と三味線が戯曲を義太夫節という音曲で語る音楽劇で、大夫と三味線が描き出す情景を耳で聞き、人形の姿や動きを目で楽しむものです。ですから、三業一体といって、大夫・三味線・人形遣いという三つのパートが結びつかなくてはいけません。ところが当地では、大夫と三味線弾きの伝承者が高齢化し枯渇して、過去の録音テープを使わねばならないほどになっていました。そこで、国民文化祭が開催される機会を捉え、義太夫・三味線教室を日本を代表する専門家集団である義太夫協会の師匠を招聘して立ち上げました。はたして応募があるかなど危惧される面もありましたが、自文化学習会や伝統芸能教室など地域と学校を結ぶ教委の連携重視機能が奏功し杞憂に終わりました。以来今日まで定期公演会や伝統芸能教室発表会等が好評裏に継続している好ましいケースとなりました。

ところが、事例として取り上げられたもう一つの役原獅子舞が、存続の危機に立たされることになってしまいました。獅子舞は、日本の村行事の長い伝統に根ざす男性優位の象徴のような存在で、当地でもその例にもれず、男子しかも嫡男のみが踊り子の条件でした。これを、少子化という事態が、男子なら可、中学生に限らず小学生へ、さらに、女子も可能と広げたにも係わらず、現今は絶対数が不足する事態にまでなってしまいました。しかも、踊り子は獅子頭と腰太鼓を付け筒袖に立つ付袴をはき、激しい動作のためその運動量は大変なもので汗ビッショリになるのをきらい、ためらう子もあるのです。さらに、獅子舞のもう一方の担い手である囃子方、特に獅子舞全体をリードする笛と獅子歌を歌う歌い手、これは大体村の古老や組頭があたりますが、五線譜はなく口伝によるので、後継者探しが容易ではありません。

このように、伝統文化が変わらざるを得ない、また変わっていく事実と、それを何とか守っていきたいと考える希望とが交差しています。でもなを、地域の民俗芸能を保存・継承・創造的発展へという意欲を持ち続け、対応を模索し、もがいているところです。



「表現へのアプローチ」

2011年10月

アップル創業者のスティーブ・ジョブズ氏が十月五日に逝った。五十六歳という若さであった。アメリカはもちろん、世界中のＩＴ関連のリーダーたちをはじめ多くの人びとがその死を哀悼した。

ソフトバンクの孫正義社長は、ジョブズ氏について問われ「芸術と技術を融合させたレオナルド・ダ・ビンチのような人だった」と、やや涙ぐみながらのコメントが印象深かった。

ジョブズ氏の「創造と破壊」の哲学をもって自己を貫くぶれのない姿は多くの方々を魅了して止まない。氏は、二十世紀から二十一世紀にかけて世界の人びとの生活を大きく変えた。まさに孫氏のいうレオナルド・ダ・ビンチのような多彩で豊かで限りなく未来を思考できる統合的な力を湛えた人であった。

ぼくはかつてデザイン事務所を経営しアートディレクター兼デザイナーとしてグラフィックデザインをはじめ様々なデザイン分野に関わっていた。

もちろん、当時からアップル社のパーソナル・コンピューターを使用し続けてきて今に至っている。今では名前も忘れかけるほど様々な機種を使い古してきた。搭載されたハードディスクのメモリーが百メガほどの機種もあったように思う。プレゼンテーションの折には互換性の有無など周辺機器との格闘もあった。ただただ懐かしいと言うしかない。

しかし、Ｃ型肝炎ウイルスの除去治療の副作用と後遺症に悩んでいた数年のあいだに世界は様変わりしてしまった。今では、ＩＴはもちろん、ＰＣとその周辺の世界からもはじき出されて途方にくれている。そのような状況にあっても、スティーブ・ジョブズ氏の訃報は大きなショックであった。やはり、分野を越えて何かを訴える力を持った人であったことは間違いない。しかも、現代に最も望まれる人物像のひとりであったのではないか。

世界経済はグローバル化していく中で人の幸せを問う方向に舵がきられていたのかどうか。いま、アメリカの若者たちが起こしているウォール街へ向けた怒りの抗議は何を意味しているのか。その動きはネットを通じて全米に広がろうとしている。政治と経済、物づくりと社会とがどのように関わっていけばいいのか。実体社会にデジタルがもたらすべきものは何なのか。大きくは人間界におけるコミュニケーションの真の姿はどうあるべきなのか。氏の思考の先には、垣根を越えあらゆる物と物とがユニバーサルに行き来する世界、身の回りの自然はもちろん、宇宙との融合も視野に入れた世界が広がっているように思えてならない。

さて、スティーブ・ジョブズ氏の訃報から始めたが表題の「表現へのアプローチ」に話題を変えていかなければならない。

まず初めに、一篇の詩らしきものを紹介したい。ぼくは詩について真剣に学んだことは一度もない。また、その素養があるとも考えていない。しかし、言葉で表現を試みようとするとき何かしら一篇の詩のような様相を呈してくるのは何故か。

つぶやき（仮）二〇一一・九

古い灰の中から
残り火を見つけた
（ながい月日が経っていた…）
赤い火が見えた時
心を握り締めながら
本当に生きていけると感じた
諦めないでよかった

そうあの時から
明日を見ることができた
素のままで今という舞台に立つ
臆することはない
人生いろいろある
そのすべてが糧になる
ふと見ればそこにある
生の証
Valuable　Energy

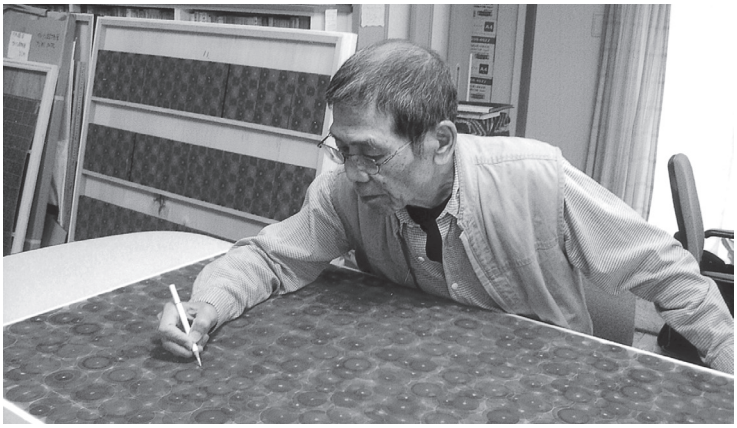
消えない火を信じていい
明日はそこから生まれる

こんな具合である。実は、この一篇にはいつの日にかメロディーがつくことになっている。こんなものに曲をつけていいのかどうか迷ったが、知人の作曲家に頼んでみた。期限を切ってないのでいつ出来上がってくるのかまったく未定だが、もし曲が出来上がったならば、ピアノの伴奏で誰かに歌っていただくという、「ライブ・トーク」をしたいと考えている。講演というにはおこがましい、いわゆるお話の時間というようなものである。「ライブ・トーク」という言い方がふさわしいかどうかわからないが、その場の環境と空間を生かしたトークにしたいと考えている。テーマはもちろん「表現へのアプローチ」ということになる。

前篇の一行に「素のままで今という舞台に立つ」とある。素のままでとはどういうままなのか。受けとる人によってそれぞれイメージする像が少しづつ違うのではないか。しかし、少し時間をおいて虚飾と気負いのないひとりの人間が立ちつくす姿を想い浮かべていただけるかも知れない。

かのひとの体験や経験の記憶は、今という舞台の上でこれから関わっていく時間と共にその姿を通して見えてくるはずである。幸や不幸、喜びや悲しみは今という舞台の上でどう咀爵されていくのか。そこに「表現という意志」が加わっていなければ何も起こらない。「表現という意志」は、互いに明日を生きる共感を生み共有の糧を生む。ここに表現へのアプローチする意味がある。

現在、ぼくは美術作家である。最近は、個展を主にほぼ毎年作品の発表を続けてきた。来年は前橋（ノイエス朝日）で企画展を開催する。二〇〇八年以降は殆ど平面作品を制作し発表してきた。来年の個展では、その平面を生かしたインスタレーション作品にも挑戦したいと考えて、今、その一部を制作中である。言葉の断片も作品として使う予定でいる。ぼくの作品は、最小限（ミニマル）の造形言語を使った表現だ。そのため、リズムとハーモニーはあるがメロディーがない。言葉はメロディーも生む。インスタレーションの中でいい効果を発揮してくれることを期待している。前出の「ライブ・トーク」も同じ期待をもって言葉と音を使うはずだ。



さて、分子の基本構造は、真ん中に＋の陽子があり－の電子がその周りを回っている。ざっくり言ってしまえばミクロの世界もマクロの世界も構造は似ていると考えられなくはない。表現の世界は人の心と心をつなぐ。この表出行為は、人間も含めたこの宇宙の仕組みの不思議と何らかのかたちで積極的に関わるコュミニケーション行為であると考えている。

ふり返ってみれば、ピカソも「創造と破壊」の画家であった。スティーブ・ジョブズ氏の生も精神も「創造と破壊」に貫かれていた。芸術も含め世のあらゆる事が概念に囚われることなく融合されて社会の中に深く根ざしていって欲しい。偏にユニバーサルな祈りを通して未来に向きたい。

最後に、今年、三月十一日の東日本大震災で亡くなられた多くの方々を哀悼すると共に被災された方々へ心からお見舞いを申し上げたい。天災に抗うことは出来ない。しかし、技術はマンパワーである。人びとに安全・安心を担保してこそ真に役立つ。福島第一原発事故は、私たちの未来に重い課題を突きつけている。

河内　世紀一（かわうち　せきかず）

東京都出身。武蔵野美術学校を卒業後、本県内の小・中学校に勤務。1979 年にデザイン事務所を設立。デザイン専門学校やデザイン会社の設立にも参画。CI デザインなどのノウハウ伝達とデザイン力の育成にあたる。
その後、4 年間放送大学で学び 2002 年に卒業。同時に筑波大学大学院へ進み 2004 年修了。美術家として活動を開始。
論文に「ジャクソン・ポロック－前衛への奇跡－」、「前田常作論－〈絵日記シリーズ〉の表現手法をめぐって－」がある。
2007 年「マンダラと巡礼の風景－前田常作の〈絵日記〉をめぐって－」（新風舎）刊行。
近年の個展、他
2004 年、2009 年、登録有形文化財旧花輪小学校記念館（みどり市）
2005 年、2009 年、ノイエス朝日（前橋市）
2009 年、2011 年、ギャラリー異人館（高崎市）
2011 年、第 2 回おおたビエンナーレ参加（太田市）

カフェの隅から

ちょっとお洒落に

竹田朋子

カステラを焼きはじめた。

たまたま目にしたテレビに京都発の熟成させたカステラが登場し、清楚な中年の女性がゆっくりとフォークを入れ、そっと口に運ぶ。うっとりと頷くように味わう姿に見惚れ、(私もカステラを焼こう！) と思いたった。カフェを開店して6年目。ひたすらケーキを焼いている日々である。

実はカステラについて、心に温めている好きな一文があるのだ。本の中の一節である。“そのお宅は、ショートケーキよりもカステラの似合うおうちだった。派手ではないけれど、ちょっとお洒落で……”

テレビの映像とこの言葉が重なり、気持ちが高揚した。

以前ケーキ教室で習ったレシピをひっぱり出し、そのおりの記憶をたどる。何とか完成したカステラを母に試食してもらった。「おいしい！」その声のトーンは、あながち御世辞でもなさそうだ。カフェのメニューに加えてみることにした。

改めてカステラの作り方を丹念に読みがら気づいたことがある。「カステラ行程」という表現だ。ほかのケーキの説明にはみられない。卵の泡立て、粉合わせ、休ませ型に流す、泡切り、色づけ、焼成、それらの手順が表になって記されている。何だか伝統工芸品を作り出すような雰囲気である。確かに手間がかかる。特に泡切りはオーブンに付きっきりの作業だ。一分間ほどで生地の表面に膜が張る。それをスプーンで端からすくい上げ、中の生地に混ぜ込んでゆく。おのずと気が入る。手のかかる子どものようだ。だからだろうか。カステラが懐かしい味がするのは ── 。焼成後、木枠からはがした紙についている部分までこそげて口に入れてしまうのは ── 。

さて、メニュー化したカステラ。地味な存在からか注文はあまりない。しかし先日、センスのよい装いの熟年の女性が、「カステラがあるわ！大好きなの。私が天国に行ったら供えてね、と娘に頼んであるのよと」と、笑顔でおっしゃる。また、小学生の男の子はメニューで見るなり「ボク、カステラ！」と即決してくれた。(やったね！) 勇気百倍である。

空気が冷たい季節。愛おしみつつ焼いたカステラに、ちょっとお洒落に粉砂糖をふりかけ、熱い飲み物と共に初冬を迎えよう。

竹田 朋子〈略歴〉
長野原町出身／群馬ペンクラブ会員
散文誌「せせらぎ」同人／短歌誌「遠天」同人
第55回「日本随筆家協会賞」受賞／第46回群馬県文学賞受賞
著書『風の吹く道』

レストラン 伊万利ダイン
前橋市文京町 2-20-22 群馬県生涯学習センター別館 TEL：027-224-1693

群馬県・伊香保温泉

HOTEL 天坊

政府登録国際観光旅館
ロイヤルチェーンホテル加盟店
群馬県渋川市伊香保町396-20
予約直通 Tel.0279-72-4489

東京営業所 東京都台東区東上野6-10-7金子ハイツ503 〒110-0015
Tel. 03-3843-0083

埼玉営業所 埼玉県さいたま市中央区下落合4-23-10-101 〒338-0002
Tel. 048-856-1660

●料理茶屋 湯の花亭 上州四季の懐石

春 夏 秋 冬

味わいの旅

——四つの食事処で料理が選べる

アパマン・土地建物・
店舗事務所・土地活用

ペット可

株式会社 藤田ビジネスプロモーター
http://fujita-biz.co.jp/
前橋市問屋町一丁目1番1号　027-251-4455(代)

ローンのお申し込みは、群馬銀行へ！

住宅ローン「金利選択プラン」	マイカーローン	教育ローン「仕送り名人」
選べる魅力で快適な住まいづくり	自動車の購入・車検等に	入学金・授業料・仕送り費用に
住宅リフォームローン	「ナイスサポートカード」カードローン	フリーローン「おまとめ太郎」
ご自宅の増改築・補修・改修費用に	ホームページ・モバイルサイトからもお申込可能	ご返済をまとめて一本化

詳しくは窓口または、下記までお問い合わせください。
群馬銀行ダイレクトセンター
0120-139138 受付時間 9:00～20:00
土・日・祝休日、12/31～1/3は除きます。

あなたの夢、応援します。
群馬銀行
http://www.gunmabank.co.jp/

編集後記

◇「遠野物語」を再読する。人間も自然の一部だということを意識せずにはいられない。自然を神として、豊かに共存していた遠野の人々の暮らしように改めて驚嘆する。

◇人が自然に対して、畏れと、感謝を抱きながら生きてきたことを物語るものが「伝統芸能」である。
　事業団では伝統文化継承事業として、12月3（土）、4日（日）に伊勢崎市赤堀芸術文化プラザを会場に、県内に伝わる獅子舞と神楽の「伝統芸能まつり」を公演する。現代文明の思い上がりを反省し、今こそ深い思いで伝統芸能を見つめ直す時期だろう。ぜひ、ご鑑賞いただたい。（ＮＫ）

◇本誌希望の方は、送料（140円×希望回数分の切手）を添えてお申し込み下さい。また、ご要望ご意見等もお寄せください。

題字・群馬県知事　大 澤 正 明

ⓒ 財団法人 群馬県教育文化事業団
（本誌からの無断転載、コピーを禁じます。）

上州文化
●第128号 ●平成23年11月25日発行（年4回発行）●発行人 小 見 輝 夫
●発行所 〒371-0801 前橋市文京町二丁目20-22 財団法人群馬県教育文化事業団
●電話 027-224-3960 ● URL http://www. gunmabunkazigyodan.or.jp/
●印刷 ㈱開文社印刷所 前橋市大手町三丁目18-7